



talk! talk! talk! 女優・黒沢あすかさん



女優 黒沢あすかさん

子役時代から劇団に所属し、映画やドラマで女優として活躍を続ける黒沢あすかさん。2003年に公開された「六月の蛇」ではオポルト国際映画祭や東京スポーツ映画大賞で最優秀主演女優賞を受賞するなど、その演技は国内外で高い評価を得ている。20代の頃から写真を始め、暗室作業も行うという黒沢さん。撮り始めた当初から現在までの写真との深い関わりをお話いただいた。

プロフィール

クロサワ・アスカ。1971年、神奈川県生まれ。1993年に「愛について、東京」（柳町光男監督）でヒロインに抜擢されてデビュー。その後数々の映画やドラマに出演し、活躍を続ける。主な映画に「良寛」（貞永方久監督）「現代任侠伝」（降旗康男監督）「冷血の罌」（瀬々敬久監督）「六月の蛇」（塚本晋也監督）「でらしね」（中原俊監督）「火火」（高橋伴明監督）「嫌われ松子の一生」（中島哲也監督）など。「六月の蛇」では、オポルト国際映画祭、第13回東京スポーツ映画大賞で主演女優賞を受賞している。主なテレビドラマに「あすなる白書」（フジテレビ系）「金田一少年の事件簿スペシャル」（日本テレビ系）「白線流し・十九の春」（フジテレビ系）「演技者〜狂うがまま」（フジテレビ系）「天花」（NHK）など。写真集に「BIRTH」（写真・横木安良夫/スコラ）がある。2005年に結婚し、現在子育て奮闘中。

Beginning 出会い

暗室に、アシスタントに..... とにかく写真に夢中だった

写真を撮り始めたのはいつ頃ですか？

21歳からです。ちょうどその頃に私自身の写真集を作っていたとお話がありまして、誰かに撮られるという楽しみと同時に、自分で撮るということにも興味がわきました。それで、写真集を撮っていただいたフォトグラファーの横木安良夫さんにいろいろ教わったのが本格的に始めたきっかけですね。その頃はモノクロで撮っていて、暗室で焼く作業も一通りやりました。

ご自分でプリントもされていたなんて、すごいですね。でも暗室以前にカメラの扱い方で戸惑ったりはしませんでしたか？

露出や絞りといった設定はオートでやっていました。そういった難しい部分はカメラに頼って、自分自身は撮ることに集中していましたね。被写体を構図の右端にしようか、左端にしようかとか、視点をどこに持っていけば素敵な、きれいな写真になるのかな、とか。どうしたら写真に自分らしさを出せるだろうとさぐりさぐり撮っていました。だから、最初の頃はものすごい数のフィルムを使っていましたね。

なぜモノクロで撮ろうと思われたのですか？

本当はカラーで撮りたかったんですが、カラーだと色に捕われがちになってしまい、たわいもないものを撮ってしまう。モノクロなら視点が定まりやすいし、面白いものと面白くないものを見極める目もやしなわれていくというアドバイスを横木さんから受けたんです。

暗室作業も横木さんに教えていただいたのですか？

はい。暗室も貸していただいて、横木さんのアシスタントさんと一緒になって教わっていたんですよ（笑）。フィルムのことから、現像やプリントに使う薬液のことなど、基本的なことはもちろん、奥の深いことまでびっちり教えていただきました。たとえば、市販されている現像液には現像時間は何分という表示があるんですが、何回も現像をして、自分に合った好みの仕上がりにするような現像時間を見つけた方がいいよ、と教えていただいたり。今だから言えるんですが、当時は演じるということよりも本当に写真に興味があって、アシスタントの変装をして横木さんの撮影のお仕事について行ったりもしていたんですよ。ちょうどその頃私が出演していた「あすなる白書」が放送されていて、顔が知られていたんですね。だから「あれ？」と気づかれているようなこともあったのですが、「バレしていない、バレしていない」と言いながらやっていた（笑）。それと同時に、被写体がアイドルの方や女優さんの場合はボーイングや表情を観察して、今度自分が撮られるときの参考にさせていただこうと思って見ていました（笑）。

初めの頃はかなり写真に夢中になっていらっやっったのですね。

すごくはまっていましたね。その頃のフィルムを取めたファイルは膨大過ぎて、段ボールに入れて実家に置かせてもらっているくらいです。

20代の頃は野生味にあふれていたといいますか、とにかく攻めの姿勢を大切にしていました。どこへ行っても勉強になりましたから、いろいろな場所へ飛び込んで行くのをいとわなかったんですね。だから、写真に取り組むことにもとても真剣でした。

Pleasure 楽しみ

そのままの自分を表現できる 自由になれるものが写真だった

どのようなものを撮っていらっやっったのですか？

最初はお年寄りを撮ることが多かったですね。その次は風景が中心になって、そして花になって。花といってもいきいきときれいに咲いているものではなくて、枯れかかっているもの。朽ちていく花の姿に魅力を感じました。たとえばチューリップだったら、花びらが落ちていって最後に残った、たった1枚の花びらと雄しべと雌しべの存在感。そういう花の姿に心引き付けられていましたね。

その時々で、撮りたいもののブームが来るのですか？

ブームというよりは、いろいろな体験をするたびに興味の対象が変わっていったという感じでした。当時、仕事をするときは1、2週間集中してだだっど忙しくなるんですけど、その他は自由な時間も多くて。だから、よく思い立ってカメラを持って旅行をしていました。行った先々で目に映るいろいろなものから影響を受けて、自分が撮る被写体もそのたびに変わっていききましたね。旅行といっても景勝地へ行くのではなくて、街の路地に入り込んでみたり、皆の行きそうなところの裏の裏をかいた場所へ行って撮影していました。海外でも同じで、街中をあちこち歩き回って写真を撮っていました。たまに不審がられることもありましたが



ね。若い女の子がカメラ片手にうろちよるしているから、何やっているんだって（笑）。

現在もそのスタイルは変えずに撮っていらっしゃるのですか？

いえ、21歳から始めてしばらくは写真に夢中でしたが、27歳から31歳頃までの間はぱったりと撮らなくなりました。1年に1度、年賀状を作るときに自分の宣伝も兼ねてセルフポートレート撮るのですが、そのときくらいしかカメラを手にしなかったですね。

27歳のときに写真に興味が薄れたのは、何か理由があったのですか？

まず、カメラが壊れたというもひとつのきっかけでしたね。あとは、その頃ちょうど自分の女優としての転換期で、お仕事が増えてきた時期でもあったんです。自分に目を向けられるようになり、撮っていただける機会も多くなって、自分が撮る写真を残すのではなく、人様に撮られた自分の姿を残していきたいという意識に変わったんです。きれいに撮ってもらった自分の写真を見て「ああ、いい素敵だな」と思いました。そういった仕事をするを自分は子供の頃から目指していたし、表舞台に立てる喜びがありましたから。今、女優としてのいい波が来ているだし、全身全霊をかけて取り組みたいと思ったんです。それでカメラはもういいやと。

なるほど。黒沢さんが女優として充実していくと同時に、写真との関係性が変わっていったんですね。

そうですね。子役時代からずっと演技をしてきて、それまでは自分自身とは違う像を求められてきました。ようするにそれは自分に仮面をつけるということ。もちろん演技ですから役になりきるのが仕事なんですけど、どこかで自分を否定されているような感覚もあって。だから写真は、好きなように本当の自分自身を表現できる世界だったんですね。写真を撮る自分を存在させることで、監督さんや先輩俳優さんたちから発せられるいろいろな意見や言葉から、自己を守ろうとしていたんだと思います。でもそれが27歳あたりから必要なくなりました。

Photo's 作品紹介

一分一秒を逃さず捉えた 黒沢さんの日々の断片



1 シャー！



2 カラダカッピカピ



3 表面張力



4 嵐の後に



5 カーン、カーン



6 エロイなあ



7 胎児



8 朝8時



9 あーらよっと



10 V (ヴィ)

Future これから

時と共に意味合いは変わっても 昔も今も写真に夢中

写真を撮らない時期を経て、現在では写真はどのような存在になったのですか？

写真を撮らなくなった頃から、自分の中にカメラが入ったような、いつでもシャッターを切られるような感覚になれたんです。女優として自信が持てたことで、本当の自分とも一体になれた。今は自分を守るために撮っているのではなく、本当に楽しいとか面白いと感じたものを撮っているという感じです。意味合いはかなり変わりました。

なるほど。純粹に楽しむためのものとして写真を撮られているんですね。では、現在撮っているものは何ですか？

今は、主人からプレゼントしてもらったデジタルカメラを持ち歩いて、日々の中で気づいたものを撮っています。デジタルカメラの手軽さに夢中になっていますね。晴天の日は光と影の美しさに目を向けたり、曇りの日は色がきれいにるので人物や動物を中心に撮っています。街中の不合理さや不条理さを感じられる面白い景色、空の写真、それから子供の写真が多いですね。

やはり、お子さんの写真は多く撮ってしまうのではないですか？

これだけは撮っておきたいと感じたらシャッターを押す。記録するという意識ですね。ですからやっぱり子供を撮ったりすることが多くなります。でも子供がかわいいから撮っているというだけじゃなくて、今までの自分のイメージとは違う、やわらかくて母性的な雰囲気の自分も女優として出していけるのではないかということを考えながら撮っていたりしますね。

では、最後に黒沢さんにとって写真の魅力とは何ですか？

1分1秒を逃さないところです。まさに今をとらえられる。女優の仕事をしているとき、撮影現場で大変だなと感じるのは、自分は集中して気持ちが高まっていて「今なら最高の演技が出来る！」というときに現場の準備の関係で「あと少しお待ちください」と言われてしまう。タイミングが合わないで、テンションを保つのに苦労するんです。でも、写真は気持ちが高まったときにすぐ撮れるからスカッと気持ちがいいんです。特にデジタルカメラは「あー！」と思った瞬間にシャッターを切れる。子供などは常に動いているので、追っかけ回しながらその瞬間瞬間を収めています。

これからしばらくはデジタルカメラが活躍しそうですね。それとも、また本格的に一眼レフカメラを手にすることもあるのでしょうか？

そうですね、当分はデジタルカメラで飽きるまで撮り続けるでしょうね。でも、一眼レフカメラともまたいずれ関わっていく気があります。今は撮りたいと思った瞬間にシャッターを切れる楽しさとともに、どこか容易に撮れてしまうことが少し味気ないなと感じているのも事実なんです。だから、あくせくしながらまた本格的に撮りたいという感情が出始めているところです。年齢や時間を重ねていくことで、また写真との関わり方が変わっていくのも楽しみです。



[> コンテンツトップへ戻る](#)

※掲載している情報は、コンテンツ公開当時のものです。

株式会社 **ニコン** 映像事業部

株式会社 **ニコン** イメージング ジャパン

© 2019 Nikon Corporation / Nikon Imaging Japan Inc.